

諸刃の剣

東日本大震災から2か月以上経過しました。道路や鉄道などのインフラは復旧しつつありますが、依然原発問題は先行きが見えない状態です。1号機、2号機、3号機、4号機、これらの単語を聞かない日がありません。実は震災直後にメルトダウン(炉心溶融)が起っていたという新たな事実も浮かびあがってきました。静岡県の浜岡原発の停止決定から目先は夏に向けての節電対策や今後のエネルギー政策と今後も原発問題から目が離せません。

先日テレビの番組で、岩手県釜石市の小中学校において普段の防災教育が校内の児童・生徒3000人全員を救った、との報道があり興味深く拝見しました。その防災教育には3つの要点があり、一つは「想定を信じるな」。巨大地震において、テレビなどで政府関係者や学者さらには東電の関係者が言い訳とも取れるようによく使われた「想定外」、さらには「1000年に一度」の巨大地震。釜石市では想定される津波による浸水状況、非難経路を示したハザードマップを作って普段から備えていたそうです。しかし、それはあくまで目安で、あえて「想定を信じるな」と教えたのは想定に頼れば想定外の事態に対処できなくなるからです。

二つめは「最善の行動を取れ」。実際の津波は想定ほど単純ではないので、予定の避難場所よりもさらに上の高台を目指した。さらに三つめは「率先避難者たれ」。必死で逃げる姿が周囲への警告となり、それを見た住民も「これはただ事ではない」という緊張感をあおる効果があるという。ある小学校の校舎の屋上に避難していた児童が中学生の避難する姿を見て後を追いつつさらなる高台に避難し助かった。その校舎は津波にのまれ見る影もなくなったそうです。小学校の高学年の児童が低学年の児童と手をつなぎ、中学生はお年寄りの車イスを押し、又、保育園児を抱きかかえて避難したという。普段の防災意識の高さが難局でもとっさに最善の行動ができ、多くの命を救った、すばらしいと思いました。

作家 吉村 昭氏が今から40年前に書いた「三陸海岸大津波」という文庫本があり、興味深く読みました。その本によると、三陸はかつて大津波に幾度となく襲われています。明治三陸大津波1896(明治29)年、昭和三陸大津波1933(昭和8)年及びチリ地震津波1960(昭和35)年がそうです。今から115年前の明治三陸大津波では約2万2千人の方が犠牲となりました。震度は2~3程度の比較的緩い地震であったがためにその後の巨大な津波にのまれて多くの犠牲者がでたといえます。その後住民はその恐怖から高台に住居を移転するのですが、いつしか利便性を優先し再び低地に住む世帯が増加し、その多くが約40年後に起こった昭和三陸大津波では犠牲となり、行方不明者も合わせて約3千人もの犠牲者をだしました。その約30年後のチリ地震津波でははるか地球の裏側で起こった巨大地震発生から22時間後に三陸に押し寄せた津波で、140人もの犠牲者がでています。

115年もの間にも巨大津波が今回も含めると4回も起っている事実から、果たして「未曾有」「想定外」「1000年に一度」というのは通用しないのではないかとと思われるような生々しい記録です。釜石市で防災教育に携わってきた群馬大学の片田教授は、「釜石は海の恵みに支えられている。津波を恐れるのではなく、上手に付き合うことがここに住みための作法なんだよ」と子供たちに呼びかけ続けてきたそうです。今回の犠牲者の90%以上は津波による被害です。想定を信じなかった多くの方は助かり、想定を信じて避難したが避難場所ごと津波に流されたという悲劇も多くあったのは悔やまれるところです。

私が小学生の頃、担任の先生がよく言っていたことを思い出します。「人間生活にとって火と水は欠かせないものだが、時には人間を襲うこともある」。諸刃の剣(もろはのつるぎ)とは、両側に刃のついた剣は、相手に打撃を与えるだけでなく自分をも傷つける恐れがある。つまり、一方では非常に役に立つが、他方では大きな害を与えるという例えとして使われる言葉です。三陸は水産資源の宝庫ですが津波の被害も多い。今回の尊い犠牲を教訓に被害を風化させないような防災意識をいかに次世代に承継していくか。又、原発は日本全体では電力の25%を支え、関西電力では約40%もが原発による発電で、経済的にも今や欠かせないものではありますが、今回のような事故による被害も多大なものになります。直ちに廃止はできないのですが、安全を確保しいかに上手に付き合っていくかが大きな課題となりました。